

我 覚醒セリ

福島県 鈴木 伊祐
平成17年3月5日 記

ミンガラバー（こんにちは!!）
義理と人情と浪花節を信奉する。西村 眞悟 代議士と、志の高い同志の一行16名で7日間寝食を共にしてビルマ（ミャンマー）に眠る将兵の英霊を慰めて感動を共有出来た事に意義を感じます。

個別に申すならばミャンマーには日本将兵の墓碑が22箇所あるそうですがその一つ2月17日バゴーでの慰霊の時、佐藤 進さん、佐藤 幸子さん（東京）共々涙を流しながら合掌していました。間をおいて尋ねると「このビルマで父親が戦死した」とのこと、「お国のために命を捧げたことは日本人として最高の道徳。父を誇りにしている」更に「供養できたのも西村先生のおかげです」と晴々とした表情になって話されたんです。私も良かったですと共感。

また2月19日のマンダレー、サガインヒルの慰霊祭では、南 英雄さん（三重県）郷土の磯部神社のお札とお布施。それに国旗を奉納されました。南さん曰く「叔父はインパール作戦に参戦して戦死したとしか聞かされてませんが、これから日本に帰ってやらねばならない事がハッキリした」と述べておられたのが印象に残ります。

この国では、どこの寺院に入るのも裸足にならなくてはならない。大気温度32度を超えるであろう、灼熱、私は石が熱くてとても歩く事が出来ずに石陰にいたら、日本将兵の「鎮魂碑」の正面に西村代議士が仁王立ちして「今度戦う時は負けないから」と一言宣言した後、吾は官軍、我が敵は。天地容れざる朝敵ぞ。敵の大將たる者は、古今無双の英雄で、これに従うつわものは、共に慄慄(ヒョウカン)決死の士、鬼神に恥じぬ勇あるも、天の許さぬ反逆を、起こせし者は昔より、栄えしためし有らざるぞ、敵の亡ぶるそれ迄は、進めや進め諸共に玉散る剣抜きつれて、死する覚悟で進むべし。と一言一句間違いなく全身全霊で歌われた。我々と現地の人達は暑さを忘れて聞き入った。遠くはインパールで戦死した英霊近くは眼下にあるイラワジ川で戦死した英霊に届く程の勢いのあるものでした。私はこの勇猛な振る舞いを見て感動した。これが祖国のスピリットだ西村スピリットだ、日本国を愛し鼓舞する男の戦闘歌だ、そして私は数年前先駆けて領有権問題がくすぶる尖閣諸島に上陸した国土、西村元防衛次官の実像に接した思いだった。そして抜刀隊歌を皆さんと一緒に歌いたく思った。

最後の慰霊祭では、2月21日ヤンゴン、同志が持参した神酒、靖国の盃を受け、恩賜の煙草をいっぷくして供養し記帳した。その時、恩賜の煙草いただいてをあすは死ぬぞと決めた夜は、の軍歌が流れた篠澤 善一郎さん（福島県）の声である。私はあとを続けて、曠野の風もなまぐさく、ごっと睨んだ敵空に星が瞬く二つ三つ。と西村代議士に見習って心魂こめて歌うと西村代議士が拍手して下くださった。今度は炎天続く中、西村代議士が音頭をとって、歩兵の本領、同期の桜を一緒に歌い、一曲ごとに心が一つになっていって同時に汗がとめどなく流れ出てきたが壮快。

愛国の至誠に燃えてこのビルマで闘い屍になられた日本将兵19万の英霊
本当にありがとうございます。

チーズベイ（ありがとう）日本国万歳



2/17バゴーの寺子屋にて文房具を生徒に贈呈

一旦は書き終えた「紀行文」を改めて書き直すことにしました。理由は平成17年3月6日付の産経新聞の6面に掲載された「ミャンマーにも韓流」という見出しの記事が原因です。内容はミャンマー国の日本離れが進行し、わが国の存在感が薄まる一方との衝撃的なものでした。かつては親日であったタイ国さえも今では中国に擦り寄り、日本を軽視する傾向にあるのです。援助を与えても離れてゆく忘恩の国は他にも数多く見られます。ミャンマーがタイのあとを追わないという保証は無く、私はそれを慮れます。

「ミャンマー教育推進プロジェクト同志会」は、今後もミャンマーに対する方針に些かの変化のないことを望みますが、彼らの動向に相応の目配りが、必要かと思われます。勿論、民間交流の重要性を否定するものではありません。

以上は紀行文としては、はなはだ脱線した感あるものの、私の心の内を正直に披瀝しました。本題に入ります。結論から申せば今回のミャンマー慰霊旅行は「生涯忘れ得ぬ思い出深い旅路」の一言に尽きるものです。

ミャンマーの社会は貧しさが目立ちましたが、物売りの少年少女達や市場の人々の熱気と活気は、必ずや此の國の民族の興隆につながるでしょう。寺子屋で熱心に学ぶ子供達は将来を背負う有力な希望の星として期待するものです。数多くのパゴタや寺院は伝統文化が窺われ、昔日の繁栄が偲ばれました。更に心優しいミャンマーの人々によって護持されている日本軍将兵の慰霊の地を訪れたときは、言い知れぬ感動と感謝の念が全身を駆けめぐるおもいでした。そして大東亜解放の為に敢然と戦い散華したわれらの先人たちの偉業を回顧して唯々頭を垂れるのみです。

それと大使公邸における夕食会は予想外であり、西村議員なくしては叶うべくもなく、帰国後は接待されたこと知人たちに自慢の種となりました。

冒頭の文とは矛盾するようですが、できればこの國を再度訪れ、此の地に骨を埋め護國の英霊となられた日本軍将兵に、日本國とミャンマー國の榮ある未來を祈願したいと思います。

これで筆をおきますが旅行中は西村 眞悟先生、新藤 勲氏、そしてガイドのツウ・ウィナインさんには大変お世話になりました。

追記 旅の終わりの頃、和食が恋しくなりました。



2/17バゴの寺子屋にて

東南アジアで人口5千万人、面積67万85百キロ平方メートル（日本の1.8倍）、東にラオス、タイ、北に中国、北にインド、バングラデッシュお国境を接した熱帯の「ミャンマー連邦」で軍事政権の国家である。1948年英国の植民地支配から開放された独立国で農業の国です。

仏教徒が国民の9割を占めています。非常に親日的で、各地の日本人墓地、慰霊碑も、よく掃除が行届いていて、感謝せずにはおられません。男性は一生の中、必ず一度は僧侶になり、修行を積み、勉強をせねばなりません。その結果「人殺しをしない」「人の物を盗まない」「贅沢をしない」と人間として、誠に立派な人生を送っていると思います。大使館の方も、事件が無く、いい国だと評しておられました。

西村議員と一週間の旅でしたが、安心して、落ち着いた日を過ごす事が出来、喜んでいきます。我々は、飛行機で移動しましたが（新しく、安心して乗れます）鉄道も結構充実しているようです。インドネシア、フィリピン、マレーシア等と比べても、安心して旅行が出来ます。バンコクの空港の大きくなったのには、驚きました。貨物機も多く、大型機が百機位待機していました。バンコクから、約1時間で、ミャンマーの首都ヤンゴンです。人口250万人の大都会です。只今、空港の拡張工事が行われています。

丁度、乾季で昼間、30度前後、夜は17度位で、非常に活動しやすい時期で、1週間一度も雨にあいませんでした。

軍事政権下でも、国民の表情は明るく、強制とか、弾圧といったイメージは有りません。電気が少なく、ローソクの灯での生活ですから、冷蔵庫、テレビ等々の無い毎日です。国交が回復したら、先ず、発電所を建設してあげたいと痛感しました。そして、今回の旅の主旨でもあります。田舎の子供達に沢山、寺子屋を造ってあげればと考えています。子供達一人一人に手渡したノートや鉛筆を輝く瞳と笑顔で受け取ってくれた多勢の姿が目には焼き付いています。日常、紙は大切に使っているようで主に竹から製っているようです。木材、海の幸、メラルド、ルビー、サファイヤ、金、銀、銅、天然ガス等資源は豊富ですが、積極的に、開発しないようです。ミャンマーといえば、パゴタ（仏舎利塔、寺院）の国です。何処に行っても散在しています。仏教徒の生活そのものと言ふことがはっきりと判ります。

千年以上、昔から十億を下らない、パゴタが建立されて今日、後世に残すべく重要なものを、レングの部分に漆を塗り、その上に金箔を貼って、黄金に甦えらせています。日本にも、沢山のお寺があります。ミャンマーのパゴタと合致するところがあるやもしれません。特に首都ヤンゴンのシュエダゴンの大パゴタは、高さ99.4mで周りを60余りのそびえる塔で囲んで、お城そのものです。この本塔の最頂部には、76カラットのダイヤモンドが施され、大小七千個のダイヤモンドやルビーが飾ってあるんだそうです。大人だいのエメラルドの仏像も寄贈されていました。この大パゴタを金21トンを使って大改装中です。竹で編んだ足場は見事で感動しました。十年位かけて仕上げられるでしょう。

バガンは漆が相当生産されるようで、修理にも、都合がよいようです。ミャンマー第二の都市、マンダレーは落ち着いた有富な感じがしました。金、銀、大理石の工房が、沢山あるようです。勿論、パゴタも多く、大きいものがあります。マンダレーは、ミャンマーの中心に位置して、最後の大王宮跡があります。3キロ四方で、幅70mの濠を巡らせた物凄い王宮です。今は、建物は有りませんが、王朝の栄華を物語っています。

マンダレー名所「サガインヒル」に、日本人墓地と慰霊碑が大事に守られていました。多くの戦死者の名前が彫んでありました。19万人もの、日本の兵隊さんが、亡くなったそうですが、お坊さんにお経を唱えていただいた時、ここに来られて良かったと、心の中で叫びました。灼熱の石畳は、素足では、歩けない程でしたが、線香を立てる時は、耐えられました。「君が代」「海行かば」の合唱の時は、胸一杯になり、声が出ませんでした。1999年、ヤンゴン日本人会の尽力で、立派な慰霊碑が建立されています。ヤンゴン市内の静かな一角です。遺族の方々は勿論、日本人の観光の方も必ずここに手を合わせに来られる事でしょう。日本政府は、もとより、現地の方々の協力を得て、永遠に管理、保存されることを切に願ってやみません。

西洋人の観光客が非常に多いのが、目につきます。観光に力を入れているので、各地のホテルは良好です。車は日本の中古車ばかりと言っていいでしょう。観光バスも当然、日本製で、名鉄観光、九州産交等の名前のあるままで使っています。日本には、養殖のエビや、チーク材も輸出されています。主食は米です。ソーメンに似た麺が割合、美味でした。中華料理が主流のようです。西瓜がよくとれるので、食後に沢山食べられ助かりました。各ホテルでペットボトルを準備してくれたのは有難かったです。仏さんの前では、靴下も駄目で一週間ほとんど裸足で過ごし、緊張がほぐれて、結構楽しかったです。

西村 眞悟議員が、全快され、元気にミャンマーを旅されたのを見て何よりも嬉しく安心をいたしました。



2/17バゴの寺子屋にて

ほとんどの車と言って良い程、十年以上前の日本車や○×観光と漢字で書かれている大型バスがミャンマーの首都ヤンゴンを走る。「1,000チャット、1,000チャット、ヤスイヨ ヤスイヨ」と両手一杯にお土産品を持って売りに来る。こんなド田舎に日本人が来そうも無い所で、しかも小学校の低学年もしくは、幼稚園児位の子供が、かたことの日本語で一生涯懸命……

今回のミャンマー旅行は林 社長（日本真悟の会会長）から出発の一週間前に突然言われました。ミャンマーの事など何一つ知らないまま参加させていただいた私は、カルチャーショックの連続でした。アジアは前回の日本真悟の会での韓国釜山以来2回目、釜山に関して、さほどカルチャーショックと言うのは感じませんでした。

今回の目的は、学校建築事業参加と慰霊、国民会議が開催中で学校の訪問を禁止されるというハプニングもあり予定していたトンテの公立小学校へは文房具を上げられなかった事もありました。バゴの寺子屋、次ぎに行ったインレ湖の学校で、勉強している子供達の目は、とても純粋で、礼儀正しく明るい笑顔だったのが、とても印象的でした。自分がどれだけ良い環境で教育を受けたのかという事を実感させられます。

慰霊では、19万人の日本兵士が土となったミャンマーでバゴ、マンダレー、ヤンゴンでの慰霊祭に参加させていただいた事は、本当に感無量です。その慰霊碑を大切に管理してくださっているミャンマーの方々には感謝です。慰霊碑の前で歌った「君が代」「海行かば」は今までは違う思いでした。バゴでの慰霊では、奥様が最初にミャンマー行きを決めたという東京から参加した佐藤ご夫妻は、夫の父親が、また伊勢の南さんの叔父さんも、この地ビルマで戦死している、個々の身近な思いがありました。今回の西村真悟先生と皆様と7日間の旅ができ同じ日本人として色々な事に感動を覚え共鳴出来た事を感謝致します。この経験を自分の将来に生かさせていきたいと思ひます。

ミャンマーの子供達の笑顔は、忘れません。 チーズベイ（ありがとう）



2/17バゴの寺子屋にて

はじめの一步

神奈川県 猪原幹雄
平成17年3月24日記

今回で二回目だと言うミャンマー慰霊の旅に参加した。数年前からテレビで見る西村さんのファンだったし、ちょうど自分を変えたいと思っていた時期でもあったから良い機会だと思った。自分も含め多くの方が「誰かが何とかしてくれる」という無責任な生き方をしていることに嫌気がさしていたし、「このままじゃいかん」「何とかしなくては」と心の中で叫んでいるだけでは、ちっとも何も変わらないことにも、とっくに気がついていたので。そんなことを考えながらの慰霊の旅は、とにかく内容が濃くてぎっしり詰まった旅だった。一番自分でも驚いたのは、マンダレー郊外のシャガインヒルを訪れたときのこと。移動中のバスで初めて聞いた「海ゆかば」を慰霊碑の前で全員で歌い始めたとき、何故だか急に込み上げるものを感じて涙が止まらなくなってしまった。人前で泣くなんて恥ずかしいと、堪えようとすればするほど声が震えて歌えなくなってしまった。人前で恥ずかしいくらいポロポロと涙を流して泣くなんて、多分生まれて初めての経験だと思う。その慰霊碑に祀られている詳しい経緯も知らないのに、ただ戦いで亡くなった人のことを想っていたらそうってしまった。何とか他の人に気付かれないようにしようと思ったが、隣にいた方に気付かれてしまい、そっと慰めるように「きっと遠い日本から自分たちのことを慰霊に来てくれたことが嬉しくて、それを伝えたかったのだ」と言って下さった。そしたら不思議と急に涙が止まったので、多分そういうことなのだろうと思う。でも僕は西村さんのあとに付いてきただけだから、西村さんに伝えてください、と心の中で彼らに伝え、その地を後にした。名前も顔も知らない戦死した方たち。その方たちの近くへ来たのだ、という思いがした。「誰かが何とかしてくれる」なんて考えてちゃいけないと思う。文化や社会を傍観しているうちに、自分自身の人生の傍観者になってしまう。まだまだ始まったばかり。「はじめの一步」なのだと思ひ。ぜひまた機会があれば参加したい。



2/17バゴの寺子屋にて

芭蕉は「月日は百代の過客」と遺したが、まさに人生そのものも含めて、長期・短期、いろんな旅がある。今回、ミャンマーから帰って、旅程を振り返るとき、宿題こそ多かったものの、「私にとって、今回の旅は、大変に意義深いものであったな」という思いを噛みしめている。同室の日加留君に「稲川さんは、今までの何カ国行かれたんですか？」と訊ねられて、記憶を辿りつつも、思わず言葉詰まった。これまでの私の旅は、さて、どれほどの意味があったのかと…。今回、単なる物見遊山の旅と異なり、同じ考え方に立った一団が、一定の目標を持って、海外の意味深い場所を目指す旅…。その意義は、行った人にしか語れない貴重なものとなろう。今後、折に触れて、その意義を語っていきたいと思っている。

帰国してから、取り急ぎ2冊の本を読んだ。ひとつは、土門周平著の「インパール作戦」新刊である。扉の詳細な図版を参照しながら戦跡を辿った。もう1冊は、98年刊の宮塚利雄著「北朝鮮ツアー報告」だった。

宮塚氏は、よくTVで見かける北朝鮮及びパチンコ産業論の専門家として知られている、ヘンな大学教授である。「北朝鮮ツアー報告」は、氏が、91年に2度立て続けに北朝鮮に入境し、その際の記録をまとめたものである。何年か前にパラパラと読んだが、今回、文庫版で読み返してみると、金正日が拉致事件を自白する以前の刊行ながら、その記述はイキイキとしていて楽しい。

北朝鮮での氏は、案内員と称する監視の目を掠めながら、市街や駅構内、市場、ゴミ箱の中まで漁って、人民通貨や切符の他、電話帳などの印刷物、食品・タバコ・日用品・女性の生理用品に至るまで、さまざまなモノを持ち帰るのだが、あまりにも変テコリンなコレクションに、二度目の帰国の際は、元山港の税関チェックで、チョイとしたスリルを味わうこととなった。そこで思い出したのが、何度か北朝鮮に行ったことがあるという友人からの一言だったという。

「気をつけなければいけないのは、案内員ではなく、同行の日本人だよ」特定失踪者問題が明らかになった今、その言葉の持つ意味は重い。

今回のミャンマーの旅で、団員の結末、彼国の国情、すべてにおいて、そうした心配が不要だったというのは、それだけで素晴らしいことである。

もう1冊の「インパール作戦」は、ひとつの疑問から読み始めたものであった。何故、あの無謀とも見えた牟田口廉也中将の作戦を、その上官たる、河辺正三・ビルマ方面軍司令官が制止できなかったのか…。

戦後日本の軍事教育に長く携わった、著者の土門周平氏は、数多くの資料にあたり、その疑問に答える一言を河辺日記に発見する。河辺正三は、その日記において、こう書いていたという。

「予は断じて角を矯めることをせず、飽く迄善導を目標とすべきなりとの信念を、中参謀長と片倉大佐とを前にして説く」

つまり「牟田口がやりたいと言っているんだ。やらせてやれ」という司令官の情けから、日本陸軍最後の決戦といわれる、この作戦が決行されたというのである。

ザガインヒルの慰霊碑の前で祈りを捧げ、ヤンゴンの日本人墓地前で「海ゆかば」を歌って、数々の無念を思った後に読む本としては、相応しくなかったかも知れぬ。だが、人間の決断には、こうした情の作用が微妙に働くこともある。それが、歴史というものかも知れない。

折から、日露戦争勝利百年、インパール作戦から60年…。この記念すべき年の旅を終えて、これらの本を読んだことは偶然なのだろうか…。

何処より吹き来たりしか熱風が慰霊碑前の歌運びゆく



2/20 インレ湖上にて
VTRカメラで撮影中

